

宮城から、伝えたいこと。

つなぐれ、どこまでも

Baton

バトン

VOL.

16

FROM MIYAGI

特集

被災地の若者たちが 向き合ってきたこと

きて・みて

【特別編】学校法人 晃陽学園つくば栄養医療調理製菓専門学校の研究旅行

【伝承施設】気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館(気仙沼市)
津波復興祈念資料館 閉上の記憶(名取市)



テーマ:

つながる・つなげていく

石巻市震災遺構大川小学校

あしたのクリエイティブ せんだいメディアテークの「わすれん!資料室」

バトンとは

世代や地域を越えて広く「伝える」、リレーのバトンのように「つなげていく」という意味を込めています。
県内外や幅広い世代の方々が復興・伝承に興味を持ち、被災地へ足を運んでいただくことを目的に発行しています。

つながる、つなげていく。

被災地の若者たちが向き合ってきたこと

新北上川が太平洋に注ぐ河口域、石巻市大川地区。東日本大震災前は約2500人が暮らしていましたが、震災で418人が命を落としました。当時14歳だった佐藤そのみさんも、大川小学校にいた妹のみずほさんを亡くしました。

そのみさんは今、映像作家として活躍しています。震災後は、映画を撮るといふ幼い頃の夢がコミュニティの危機や取材カメラを向けられるという非日常の世界に埋もれるなかで、日本大学芸術学部映画学科に進学。在学中にふるさと大川の住民の協力を得てフイクション『春をかさねて』とドキュメンタリー映画『あなたの瞳に話せたら』を制作し、震災の経験を映像に表現しました。特に後者は東京ドキュメンタリー映画祭2020短編部門準グランプリ・観客賞を受賞するなど高い評価を得ています。

災害では喪失感を抱えながら生活の立て直しに懸命な大人の傍らに、必ず子どもたちがいます。あの3月11日もそう。周囲の状況に違和感を抱きつつ、体験や感情をまだ十分に伝えるすべを持たなかった子どもたちは、15年後の今さまざまな場面で自らを表現し始めています。その根底には何があったのか、あの体験をどう捉えているのか。そのみさんとその作品を通して浮き彫りにします。

『春をかさねて』



東日本大震災で妹を亡くした14歳の祐未とれい。祐未の家族はひっきりなしに被災地を訪れるマスコミに遺族として対応し、祐未自身も気丈に取材に応じている。一方、れいは東京から来たボランティアの大学生に恋心を抱く。石巻市大川地区を舞台に、二人の中学生の心の揺れとすれ違い、言葉にしがたい日常を繊細に描いた劇映画。大学休学中の自主制作として主に2019年3月撮影。45分。

『あなたの瞳に話せたら』



東日本大震災の津波で児童74名・教職員10名が亡くなった石巻市立大川小学校。ここで友人や妹を亡くした当時の子どもたちが、故人に宛てて手紙を綴った。そして遺族の一人である「私」がその幼馴染みや懐かしい場所にカメラを向ける。あの頃の子どもの「その後」を描くドキュメンタリー。日本芸術大学芸術学部映画学科2019年度卒業制作。東京ドキュメンタリー映画祭2020短編部門準グランプリおよび観客賞受賞。29分。

*ともに監督&脚本・佐藤そのみ/2019年製作/配給・半円フィルムズ/劇場公開2024/12/7





伝えたかったことを、 自分の手で伝える。

佐藤そのみさんが生まれ育った石巻市大川地区を描いた劇映画『春をかさねて』とドキュメンタリー『あなたの瞳に話せたら』。全国で静かな波紋を生み、2024年に劇場公開もされた両作品には、それぞれ「あの頃の自分」と「その後の自分」が表現されています。制作から7年の歳月を経たからこそ語ることのできる、震災の記憶、作品に込めた思い、そして映像作家としてありたい姿とは――。出演者から見た撮影の裏側や思い出と併せてご紹介します。

映画を、大川を撮りたい

――もともと「映画を撮りたい」という夢を抱いていたそうですね。

12歳の頃から漠然と考えていました。いつか大川の風景を撮りたい、ここに暮らす人たちの関係を作品として残したい、と。映画館が身近にあ

るような地域ではないし、映画自体そんなにたくさん観ていたわけではないのに、進学先も日本大学芸術学部映画学科と心に決めていました。大川の、自然が豊かで人と人の距離が近い、独特の空気が流れる風土が、表現したい、伝えたいという気持ちにさせてくれたのかも。外の世界をあまり知らなかったからそう思えたのかもしれませんが。

――「取材され続ける」という経験は作品に影響を与えましたか。

はい、すごく。だから最初はドキュメンタリーを撮ることは考えませんでした。私がカメラを向ける側になったら、あのと自分がされて嫌だったことを地元の人に経験させてしまおう、同じ苦しみを与えることになると思ったんです。実際の経験や心情を架空の人の中に吹き込んで、物語として届けようと思いました。それが最初の作品『春をかさねて』です。2018年から2019年にかけて、大学を休学して準備と撮影をしました。

続けなくてよい」ということ。例えば取材の求めに応じてもいいし、そうでない選択もある。こだわることでも苦しむ必要はない。震災後は人間関係に亀裂や分断が生まれ、疎遠になる人同士をたくさん見たので、映像の中で修復させてあげたいという気持ちもありました。

ボランティアで来た大学生たちとの交流シーン。若者たちのやり取りや、そこで芽生える心情がリアルに描かれている。
『春をかさねて』より
©Sonomi Sato

んだ。そして、題材はやっぱり大川だったのだと思います。

取材カメラを向けられ続けた十代

――大川地区には震災直後から新聞やテレビなどの取材陣が押し寄せました。小中学生もよくコメントを求められていましたね。

――14歳、中学2年生のとき東日本大震災が起きました。映画に向かう気持ちに変化はありましたか。

映画のことなんてしばらく考えられませんでした。きれいだっただけの風景も、知っている人たちも、あらゆるものが失われた場所から何かを創り出すなんて……。幸い自宅は残りましたが、大川小学校の6年生だった妹のみずほを亡くしました。知人もたくさん亡くなつて、将来のこともやりたいことも、何も思いつかない。ただ毎日を過ごすだけでした。

――それでも映画の道に進まれましたね。

高校では演劇部に所属していましたが、進路を考えたとき、「やっぱり、私は何よりも映画を撮りたいんだ」と思っただんです。震災があってもなくても、たぶん映画の道を選

特に津波から助かった小学生は繰り返し取材されました。でも、できあがった記事や番組を見ると、別にこの子を取材して負担を強いる必要はなかったんじゃないかと思う内容だったりして。私自身も遺族の一人として取材を受けましたが、本人が「伝えたいこと」より「求められる答え」が優先され、大人が欲しい言葉に編集されると感じ取っていました。それに、一度取材を受けると次の依頼も来ます。断ればその役目が他の子に回って、新たに葛藤する人が出

てくるかもしれない。そんな思いから、自分の意思を無視して、取材を受け続けた時期もありました。他にもそういう子は多かったと思います。

――そんな大人の都合に振り回された世代の佐藤さん自身が、ふるさとの大川の経験を『春をかさねて』や『あなたの瞳に話せたら』という作品で表現しました。主な撮影地はもちろん大川でしたね。どんな思いがあったのか、改めて聞かせていただけますか。

あの日々は非日常でしたが、絶望はしていなかった。この風景を、経験を、マスコミの群れも家庭内のできごと、関係も、ぜんぶ忘れたくなかった。たとえ忘れたとしても、映像に残せば後々きっと自分のためになるだろうと想像しました。映画を撮ることで次へ進めそうな気がしたんです。

――『春をかさねて』で最も伝えたかったのは。





当時大川小学校の生徒で、命が助かった一人である「てっちゃん」の手紙では、メディアでは報道されない本音が綴られていた。

『あなたの瞳に話せたら』より ©Sonomi Sato

亡き人へのモノローグ

——一方の『あなたの瞳に話せたら』は、そのみさんが「なるべく避けていた」というドキュメンタリーですね。

復学するとすぐ卒業制作に

取り掛からなければならぬ時期でした。すでに制作グループがそれぞれできあがっていたので、一人で作れそうなドキュメンタリーに挑戦することにしました。

——全編を貫く「手紙」のモチーフはどんな着想からですか。

インタビュー中心のドキュメンタリーにはしたくなくて、また、亡くなってしまった人への思いを誰かのナレーションで代弁するより、亡き人を愛おしむ人自身のモノローグで伝えられた。そう考えていたとき、「手紙」という形式なら本心がより浮かび上がるし、知らない誰かが観ても、例えば私の妹のことを想像してくれるのではないかと。

——手紙執筆の依頼が難航したそうですね。

当初は行方不明の子どもの親御さんや亡くなった先生の遺族など、いろんな立場の人のオムニバス形式とする構想でした。でも数名の方に依頼

をお断りされてしまいました。大川小のケースは児童の命を救えなかった学校側対遺族という構図で語られることが多いけれど、私自身は先生たちと子どもたち、一つひとつの失われた命に差はないから、その遺族の手紙と同じ位置に並べたかった。先生たちを恨むような感情はありません。けれども、当時は裁判が進行中という事情にいろんな感情が絡み合っていて、手紙という手法の困難さを突きつけられました。そんなときにお願ひしてみたのが、幼馴染みの「てっちゃん」と「ともちゃん」です。てっちゃんは亡くなった同級生たちへ、ともちゃんは亡くなった妹へ宛てて手紙を書いてくれました。

——二人の手紙には、そのみさんとの関係性だからこそ生まれた言葉があふれていると感じました。

あのころ私たち世代が取材に応じて表に出た言葉は、ほんの一部。あれだけが真実とは言えないし言葉の背景までは見えないものでした。でも、

てっちゃんやともちゃんとは正直に、大人が聞いたら顔をしかめるようなこともいっぱい喋り合っていました。だから、私からの依頼ならこれくらい言っても大丈夫だろうと安心して書き、喋ってくれたのだと思います。

——『あなたの瞳に話せたら』の撮影後、大川小学校校舎は震災遺構として保存が決まり、現在は立ち入り禁止です。その点では記録映像としても貴重ですね。

そんな意識は当時まったくありませんでした。「春をかさねて」では、大切なシーンを撮るのは校舎しかないという本段階で決めていたものの、ロケをしてよいものか、あそこでお芝居をするなんて不謹慎と思われるのではと心配が先立ちました。恐る恐る当時の遺族会長に相談すると、「あそこは私たちが思い思いに表現をして良い場所なんだ。好きにやっておいで」と背中を押してくれた。おかげで安心して撮影に臨みました。

地元の人の感想が喜びに

——両作品は2021年3月、石巻市の旧観慶丸商店でお披露目上映会とそのみさんと出演者の皆さんによるトークが行われました。上映はあまり気が進まなかったのですが、

震災遺構として保存が決まる前の大川小学校で撮影が行われ、今では学校内部を見られる貴重な映像に。

『春をかさねて』より ©Sonomi Sato



なぜですか。

自信がなかったんです。自分の内側がむき出しになったようで、怖くて「観てほしい」とはとても思えません。もう一つは、「妹を亡くした監督の」という肩書が添えられて、作品より私自身に焦点が当たるとは不安ではないか

そのみさんが生まれ育った大川地区の美しい風景や日常が丁寧に映し出されている。

『春をかさねて』より ©Sonomi Sato

——大川地区での上映会は、監督が生まれ育ったふるさとを撮り、地元の方が鑑賞するという特別な場でしたね。

という不安や警戒がありました。コロナ禍で上映機会がなくなったのをいいことに、そのまま封印しようと思っていました。でも、観てくださった方から「ぜひ上映したい」という依頼が少しずつ増えて、全国各地で40回近く上映会が開かれ、2024年の劇場公開につながりました。

「震災」「遺族」から解き放たれて

——作品が世に出て5年、気持ちに変化はありますか。

のが本当にうれしかったです。「震災の前に戻った気分だ」という声もありました。上映会自体、あの後ばらばらになっってしまった人たちが集まれる貴重な場だったんですね。

私はずっと「震災の映画を撮らなければ」という焦りにも似た思いに縛られていたんです。でもこうして完結したパッケージを残せたことで、その切迫感から距離を取れるようになったような気がします。もう記憶も風景も消えることがない、囚われなくていい、安心して次に進んでいける。親との関係性も少し変わりましたね。制作にはすごく協力してくれて、お互い関わる時間そのものも長かったです。作品ができあがって上映を重ねるにつれ、不思議とフラットな関係になれました。親がどう感じているのかちゃんと話したことはないの

首都圏など被災地の外での上映会では「震災の大変さがわかりました」などという感想が多くて、それはそれでありがたいのですが、地元の反応はけっこう違います。「あそこが映ってる」「懐かしいねえ」って、まるでみんなが炬燵に入ってホームビデオでも鑑賞している雰囲気。そもそも外に発信するより地元の人に観てもらいたかったので、願いが叶った瞬間でもありません。「震災をテーマにした作品はたくさんあるけど、一番しっくりきた」と言われた

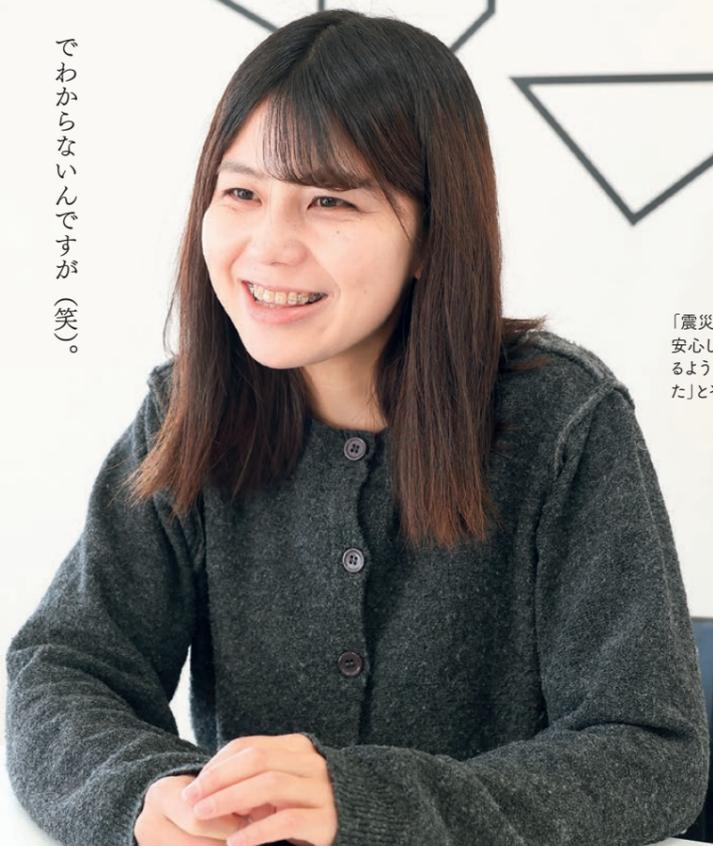
「震災を映画にしたことで、安心して次に進んでいけるような気持ちになりました」とそのみさん。

でわからないんですが(笑)。

——今後挑戦したいことを教えてください。

今は震災とは違うテーマの創作に向かっていきます。2024年に作った短編『スリーピング・スワン』では、子どもたちの性暴力に遭った若者が過去と向き合う姿を描きました。次は長編にも挑戦したい

いと考えています。これもずっと温めてきたテーマですが、もう少し具体的になったらみなさんにお話しすることになります。いつかきっと「震災で妹を亡くした監督」という形容詞がなくても観てもらえる、普遍的な作品を生み出したいと思っています。



「春をかさねて」出演
今野祐未役
斎藤小枝さん
(札幌市在住)



「春をかさねて」より ©Sonomi Sato

家族で函館市から石巻市に移住したのは震災翌年の2012年、私は小学3年生でした。母と一緒に石巻の劇団「スイミー」は、まだ「夢の途中」の一員として活動していた中学3年生のときに出演しました。劇中には母親役として私の母も出演しています。

出演のオフアワーをいただいたときは初めての映像作品に興味があわく一方で、「震災を経験していない私が演じていいのかな」という不安が大きかったのを覚えています。まさに「被災地に被災して家族を亡くされた方もたくさんいました。石巻の暮らしに楽しみ、友達もたくさんできたものの、被災当事者でないことにコンプレックスというか、引け目を感じていたんです。

劇部の面々です。少しでも制作に協力できてよかったです。作品をご覧になった方はおわかりのように、実際の大河には美しい風景が広がっています。その地に立つと私にも震災前の風景や住民同士の密接なかかわりが想像できました。この風景を、あのできごとを「自分ごと」の物語として撮影しようと思った決意と、その思いを完遂してこれほどのクオリティの作品に仕上げた力には感服します。

私はこれが初の映像作品でした。その場の芸術である演劇とは異なり、映像は一つの形になってずっと残ります。この作品を広く届けたいという方たちの熱意が上映の広が



主人公の祐未が、芝原さん演じる新聞記者から取材を受けるシーン。「春をかさねて」より ©Sonomi Sato

仲良しの妹を突然亡くした主人公の祐未は、状況をよく理解できる利発な子。それだけに自分の気持ちをうまく言葉にできない辛さを抱えています。これは演技力だけではとてもカバーできないと悩みました。本読み段階や撮影直前に、監督は自分が経験した状況や心情を丁寧に説明してくれましたが、何回やっても正解が見えない、納得できない。葛藤する私に、監督はいつも「小枝ちゃんの思っているとおりでいいよ」と肯定する言葉をかけてくれました。

映画は舞台と違い、その場で観客の反応がわからないという戸惑いがありました。それだけに、各地上映を重ねて、撮影当時は想像もなかったほど大勢の方が観てくださったことに驚いています。大学の先生や職場の上司など、震災を経験していない方からも「被災地をリアルに感じた」「当時の情景が目には浮かぶ」という声をいただきま



衣装の一部や自転車は、そのみさんの私物を使用して撮影された。「春をかさねて」より ©Sonomi Sato

した。実は、祐未の自宅は監督の自宅、作中で私が着ていた洋服も乗っていた自転車も、多くが監督の私物でした。ロケでは毎回、監督のおばあさんが出演者や撮影クルーのためにおいしいお料理を用意してくれるなど、まるで一つの大きな家族のようだったんです。それもリアリティにつながったのだと思います。

現在は札幌市で会社員をしています。遠くにいると震災の記憶が風化していることを痛感します。これを観て震災の経験を思い出したり、新た

出演者インタビュー

両作品には地域の住民、佐藤そのみさんの友人、そしてプロの俳優が出演。それぞれの持ち味でひとつの世界を作り上げました。出演者が語る制作裏話、そして自身にとっての出演作とは――。

りを拡大させた、その過程を見てきました。もっと広がって行くことを願っています。映像作品に出演したことは俳優として一つの財産です。それが佐藤そのみさんの作品であることを誇りに思っています。小中学生の頃に過酷な震災を体験して、それをどう語っていいのか悩んでいる方はたくさんいると思います。これからもそんな世代の発信を微力ながらお手伝いし、支える側に回っていかれたらと思っています。

『あなたの瞳に話せたら』出演
紫桃朋佳さん
(横浜市在住)



現在は横浜でヘアメイクの仕事をしている紫桃さん。

私と妹の千聖は何をするにも、そのみ先輩と妹のみずほ

ちゃんと一緒にでした。そのみ先輩は「映画を撮る」、私には「ヘアメイクの仕事をする」という夢があって、いつか一緒に仕事しようね、撮るときは声をかけてと話していたので、その願いが叶えられました。「春をかさねて」でも出演者のヘアメイクを担当させてもらいました。

震災後はいろんな記者にコメントを求められました。学校の先生や友達もその新聞やテレビを見るから、言葉を選んで話しました。「つらく悲しくて頑張っている女の子」というイメージから外れるような発言は、そぎ落とされるわかっていました。でもそんなイメージでは見られたいとも思っていました。

そのみ先輩に「手紙を書いて」と依頼されてすぐ、亡くなった妹に宛てて書くこと決めました。書くことで考えがまとまる、自分のやるべきことが見えてくるだろうと感じ、観た人がどう思うかは考えず、

な気づきが生まれたりするきっかけにしていただけだからと思います。そして大川の美しい風景を実際に見に来てほしい。被災地は悲しい記憶だけの場所ではありません。他の被災地も含めて、変わりゆく風景も復興の証です。

「春をかさねて」出演
植村記者役
芝原弘さん
(仙台市在住)



東日本大震災から5年が過ぎた頃、私は東京に足場を置きながら故郷の石巻で「いいのまき演劇祭」の立ち上げに参加しました。震災の伝承を、演劇を通して表現したいという思いもありました。監督と初めて会ったのもこの演劇祭です。主役を演じる中学生を

素直な気持ちを表現することだけ意識しました。

だから「出演した」とは意識してなくて、ただ幼馴染の依頼に応え、いつものとおり喋っただけ。何も隠さず、飾らずに「今の自分」を伝えたかったんです。そもそも、そのみ先輩は小学生のときから毎日デジカメを手にして、私たち姉妹の写真を撮っては一緒にパソコンで見て遊んでいました。私にとってはその延長みたいなものです。「あなたの瞳に話せたら」を一言でいうと、「自分の励みになる作品」ですね。経験したこと、大人になったら忘れそうなこと、横浜でヘアメイクの仕事頑張っている理由、すべてが込められています。今もスマホに手紙のメモを残してあって、ときどき見返しては自分をチャージします。憧れていた仕事を続けてこられたのも、この作品があるからです。

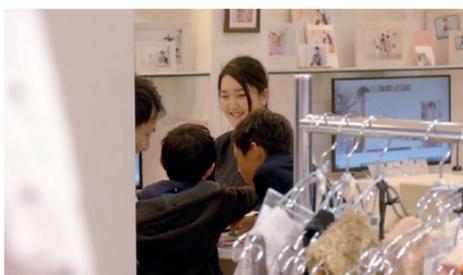
私には「あの震災の子」で

探す目的で、観客として来場していました。その後、初めて監督と二人でお会いした新宿駅の喫茶店で、私自身の出演を打診されました。

震災当時に中高生だった世代で、あの経験を表現したい、作品を創作したい、と考える人に初めて出会ったように記憶しています。うれしかったですね。ただ、妹さんを亡くした経験を題材にすると知って驚きました。さらに、私をのぞく記者役全員が新聞社やテレビ局の本物の記者だということもまたびっくりしました。描きたいのは遺族に無理な取材を強いる記者との対立といった構図ではなく、遺族に寄り添う記者と記者を信頼する遺族との関係性なのだと思えました。私も相手の気持ちに真摯に寄り添うことをポイントに演じました。

それにしても、実際の記者に出演依頼ができ、依頼を受けた側も承諾するほど、監督は被取材者として記者たちとしっかり関係性を築いていたのだからと想像しました。主人公の同級生たちを演じるのは私の後輩、石巻西高校の演

はなく「仕事ができる朋佳ちゃん」「メイクの紫桃」として認められたらいいという揺るがない思いがあります。妹はやりたいこともできなくなっていたけれど、私はいろんなことを楽しもう、楽しく明るく元気に美容の仕事をしようと、心がけてきました。「お姉ちゃん、今日着る服を選んで」と甘えてくるおしゃれな妹にとって自慢の姉でいたい。妹に「見て、今の私おもしろいよ」と言える自分でいたい。震災があつたからこそ、自分のために生きよう、自由に突き進もうと思えます。手紙の中の「震災からの自分、嫌いじゃないかも」というフレーズもそんな気持ちの表れです。



『あなたの瞳に話せたら』より ©Sonomi Sato

ききみ

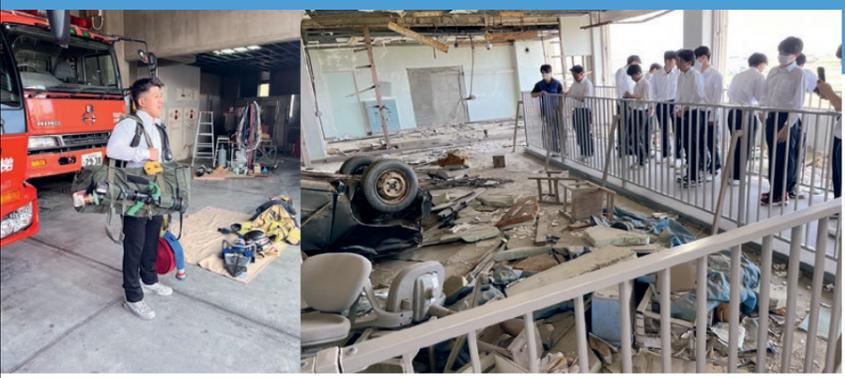
特別編

ききみ

今回の「ききみ」は、学校法人晃陽学園つくば栄養医療調理製菓専門学校が毎年行っている気仙沼への研修旅行をご紹介します。学校はこの研修にどんな思いを込め、学生は現地で何を学んだのか。校長と教員、そして学生に話を聞きました。

復興の一助として 学生の学びの場として

茨城県牛久市にあるつくば栄養医療調理製菓専門学校は、「食」を学ぶ学科と救急救命士を目指す学科があり、気仙



左) 気仙沼・本吉広域防災センターで資器材の着用体験。右) 気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館を見学。

沼リアス調理製菓専門学校(以下、リアス専門学校)とは姉妹校の関係です。同校では、毎年1年生が気仙沼市を訪れ、2泊3日の研修旅行を実施。茨城県古河市にあるもう一つの姉妹校、晃陽看護栄養専門学校でも、同様に気仙沼を訪れています。気仙沼研修のスタートは2015年。学校法人晃陽学園の齋藤行信理事長が気仙沼にゆかりがあったことから、復興支援の1つとして始まりました。今井恭子校長は、研修旅行に掲げた2つの目的についてこう話します。「1つは、被災の現実を見て地域の方の話を聞くことで、震災を自分事として受け止め、復興に向けた人々の動きを自らのエネルギーにする。もう1つは、気仙沼の豊かな食材に触れ、食し、地域の人と触れ合いながら郷土料理などを学ぶこと。震災学習と食文化研修の意味合い



宿泊した「亀山荘」での夜間学習の様子。

気仙沼だから心に響いた 現場の厳しさと使命感

救急救命学科の研修旅行は、気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館を訪れて災害の様子や防災を学んだほか、気仙沼・本吉広域防災センターで地震の揺れや煙避難を体験。さらに、被災現場を回りながら消防官の話を聞くなど、震災学習に特化した3日間でした。



た。同学科の由井聖比呂さんにとって、東日本大震災は「中学の教科書で読んだ出来事」という認識だったと言います。「自分事として考える機会がなかった震災ですが、伝承館を見て、地元の方の経験談を聞いて、大災害は『身近にある恐怖』なのだと感じました。特に印象的だったのは、伝承館で見た中学校の卒業式の映像。避難所となっている

学校の体育館で、避難している方々にも向けて感謝や決意を伝える姿に胸を打たれました。研修旅行を実施するのは、入学から間もない5月。学生の仲もまださこちない時期ですが、「これを機会に一体感が生まれます」と学科長の石塚光先生。「この学科は、災害現場の最前線で活動したいという希望を持って学ぶ学生

3日には南三陸町も訪れ、旧防災対策庁舎を見学。

が多いのですが、東日本大震災の発生時はまだ幼く、当時の記憶がほとんどありません。実際に被災地に行くことで、現場活動の厳しさを理解し、消防職員を目指す者として意識が変わるのを感じます」と話します。震災で家族を亡くしながらも現場活動を行った消防官の話では、由井さんも仕事への覚悟を学びました。

「自分も同じ立場になったとき、同じことができるのか不安にもなりましたが、最前線に立つ消防士がいなければ助からない命もあります。身が引き締まりました」。

同学科は震災関連の学びが大半ですが、宿泊先では海の幸満載の夕食も堪能したそう。石塚先生は「おいしい海産物も学生が楽しみにしていたことの1つ。喜んで味わっている姿が印象的でした」と振り返ります。

初めての食材にも挑戦！ 視野を広げ将来につなげる

食を専門とする学科は、1年制と2年制があり、1年制は6月に、2年制は2月に気仙沼研修を行いました。伝承館での震災学習は救急救命学科と共通していますが、こちらの学科では、魚市場の見学やリアス専門学校で食を通じた学生同士の交流を実施。教員によるマグロの解体や、学生のリクエストによるホヤの殻剥き実演もあったそうです。「学生はみんな食に対して好奇心旺盛。気仙沼でおいしいものが食べられることを楽し

みにしていましたし、「もうかの星」(モウカザメの心臓)など初めての食材にも目をキラキラさせて積極的に挑戦していました。気仙沼ならではの食材に触れ、味わって、とても有意義な時間になったと感じます」と調理師学科長の斎藤達也先生。初めて食べた「もうかの星」について「クセがなくておいしかった」と話すのは調理師学科の栗原凜花さん。「地域で育った食材をさまざまな調理法や味付けで食べることできて、とても貴重な経験でした。震災学習では、被害があった現地

の方の話を聞き、自分がやりたいことや学びたいことができて今の環境が当たり前ではないと改めて感じて、もっとがんばりたいと思いました」と振り返ります。実は、気仙沼研修の直前には、リアス専門学校の学生が同校を訪れており、学生が作った昼食と一緒に楽しむ時間も。さらに、秋の学園祭にはリアス専門学校の先生が参加し、学生が作った焼菓子を販売するなど、研修旅行以外にも交流が活発です。「同じ志を持つ学生にとって、相互交流はとてもいい刺激になって

います。研修旅行では、マグロを食べながら両校の学生が仲良く話をする姿も多く見られました」(斎藤先生)。3つの姉妹校では、新たな試みとして学生考案によるオリジナルドレッシングを開発中。気仙沼地区でホテルグループを営営する企業と産学連携による商品化を目指しており、研修旅行をきっかけに交流はさらに広がりを見せています。



リアス専門学校の職員によるマグロの解体ショー。



上) 気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館の前で記念撮影。
下) 姉妹校・気仙沼リアス調理製菓専門学校の学生と記念撮影。

2日に宿泊した気仙沼プラザホテルにて。





解体前の旧関上中学校から引き取った品々も展示してある。



総合実習棟前にある「折り重なった車」。積み重なったがれきの高さや車の状態が当時の状況を物語る。



旧南校舎1階にある「破壊された校舎」。語り部の方の詳細なガイドで、津波の威力がどれほどだったかがより感じられる。

施設① **キ-ワード** □津波被害を知る □まちの歴史を知る □復興を感じる

気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館

津波の爪痕をそのままに
震災の教訓を伝える

気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館は、被災した「宮城県気仙沼向洋高等学校旧校舎」を震災遺構として、地震と津波の爪痕を当時のまま残しています。教室に残る瓦礫や、4階まで到達した津波の跡が、今も自然の脅威を伝えていきます。映像や展示では、震災当日の切迫した状況や復興への歩みを見るができます。また、遺構を案内する語り部には、地元中学校生も活動しています。震災の記憶を風化させず次世代へ繋ぐための重要な拠点であるとともに、自然災害との向き合い方を学び防災意識を高め、命を守るための教訓を伝える施設です。



外から校舎を見ると、4階には、近くの冷凍工場が流されぶつかった跡が、津波の高さを実感できる。



映像シアターでは、300インチの大型スクリーンで震災時及び直後の記録映像を見ることができる(毎時00分・20分・40分に上映)。

施設② **キ-ワード** □津波被害を知る □証言を聞く □復興を感じる

津波復興祈念資料館 関上の記憶



施設の上には太平洋からの潮風を受けて鯉のぼりがはためいている。

記憶を語りつなぎ、
命との向き合い方を学ぶ

名取市関上、真山運河を臨む場所に「津波で亡くなった子どもたちが帰る場所」の目印として立てられた鯉のぼりがはためています。ここは津波復興祈念資料館「関上の記憶」。この施設は主に語り部活動を行う資料館で、関上に関する写真の展示や津波に関わる写真・映像を使った震災学習が行われているほか、近年では他地域の語り部に思いを語る場を提供する取り組みも行っています。東日本大震災の記憶が薄れても、語り合い、向き合い続けることで次世代の命を守るように。ときに悲しみを共有しながら、震災の教訓を後世へと語りつないでいきます。

震災前の航空写真の展示も、大きく変わってしまった地区の様子に津波の威力を感じる。



代表を務める丹野祐子さん。津波で当時中学一年生の息子さんを亡くし、「子どもたちの生きた証を遺したい」との想いで施設を立ち上げた。

問 毎年3月11日に行われる「追悼のつどい」では鳩型の風船を飛ばしています。この風船にはどんな想いが込められているのでしょうか。

答 総合実習棟前の折り重なった車は、何の影響を受けてこのようになってしまったのでしょうか。

問 総合実習棟前の折り重なった車は、何の影響を受けてこのようになってしまったのでしょうか。

答 総合実習棟前の折り重なった車は、何の影響を受けてこのようになってしまったのでしょうか。

DATA ◎宮城県名取市関上東3丁目5-1 ☎022-738-9221 ●[月・火・水・金・土] 10:00~15:00 [日・祝] 9:00~15:00 ㊟木曜・偶数月の第三日曜AM(特別閉館日あり) ※無料(10名以上の団体は要事前連絡) 🌐https://tsunami-memorial.org/

DATA ◎宮城県気仙沼市波路上瀬向9-1 ☎0226-28-9671 ●[4月~9月]9:30~17:00(受付は16:00まで) [10月~3月]9:30~16:00(受付は15:00まで) ㊟月曜日(祝日の場合は翌日)、年末年始(12/30~1/4) ※一般 600円/高校生 400円/小中学生 300円 🌐https://www.kesennuma-memorial.jp/



vol.16

「わすれん！資料室」

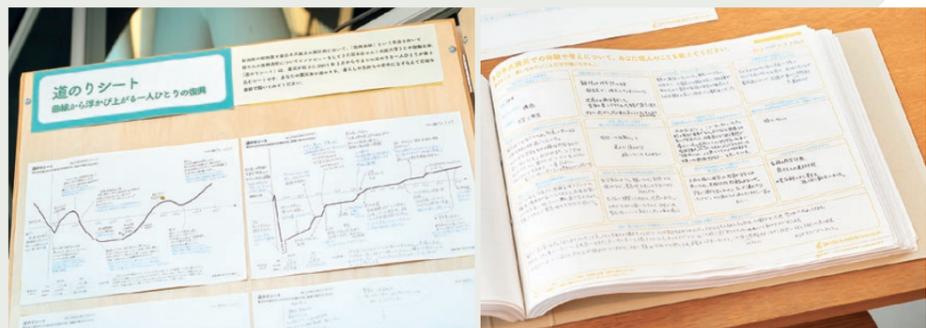
せんだいメディアテークの

市民から寄せられた 東日本大震災の記録

ガラス張りの外観が目を引く仙台のランドマーク「せんだいメディアテーク」は、図書館やギャラリー、スタジオシアターなどが集まる複合施設です。この2階に、東日本大震災の記録を展示する「わすれん！資料室」があります。「わすれん！」とは、震災発生から間もない2011年5月3日に開設された「3がつ11にちをわすれないためにセンター」の略称。「わすれん！」の役割は、市内外の人が震災にまつわることを写真や映像、音声、テキストで自ら記録する活動（コミュニティ・アーカイブ）を支援し、展示やウェブなどで活用することです。お話を伺ったせんだいメディアテーク 企画・活動支援室の北野央さんは、「わすれ

ん！」開設当初から関わるメンバーでもあります。「せんだいメディアテークは、文化・芸術などさまざまなテーマを通して学びの場をつくる仙台市の生涯学習施設です。そのため、東日本大震災の記録を伝えることも市民の学びになると考え、「わすれん！」を開設しました。震災を記録したい人を募り、それぞれの体験や思いの記録を公開につなげています」。

同施設には震災前からデジタルカメラやビデオカメラ、パソコンなどの機材を市民に貸し出す仕組みがあり、「わすれん！」はそれを活用する形で始まりました。貸し出した機材で撮影された震災関連のデータを提供してもらい、権利処理をして公開する流れです。以前は、イベントや企画展で公開していましたが、「普段から見られるようにし



東日本大震災から今までの、個人のこれまでを書く「道のりシート」。一人ひとりの復興の様子がいろいろな曲線で浮かび上がる。

東日本大震災に関する12の質問に答える「インタビューシート」。県内外の方、震災後に生まれた方など、様々な体験や思い出が綴られている。



屋台型の「アーカイブール」。引き出して各地の定点観測の記録を見たり、ハンガーに吊るされた写真を眺めたり、レコード型にデザインされた各地の記録を探したりなど閲覧するアクションにひと工夫。

震災は身近にあるもの 過去のものにはしない

資料室は、可動式の屋台に被災地の写真やウェブ記事を収蔵した「アーカイブール」



市民が撮影した発災直後の食事の写真「3月12日ははじまりのごはん(3.11オモイデアーカイブ)」。訪れた人が自分の体験を付箋に書いて貼っていくことで、記憶が記録に。



右)「わすれん！録音小屋」は、テーブルと椅子2脚、マイクがあり、対面式で録音できる。中には小物なども置かれており、誰かの部屋に来たような空間。下)録音小屋で話したことをきっかけに、自閉症の子を持つ親である橋本武美さんが障害児を持つ家族に当時の話を聞きまとめた「3.11あとのホント」。

このケアに
助けられた

さまざまな
困りごと

東日本大震災の発生から15

年となり、「わすれん！」も同じ年月、活動を続けてきました。はじめは被災地の写真や映像が多く集まりましたが、復興が進むとともに風景の記録は少なくなり、3年ほど経つとイベントの来場者も少なくなってきたそう。そこで、人との関わりを増やすために行ったのが、食に関する写真をパネルにし、当時の食事体験や感想を付箋に書き残してもらった「3月12日ははじまりのごはん」です。あの日

わすれん！
資料室

DATA ◎仙台市青葉区春日町2-1(2階)
☎022-713-4483(せんだいメディアテーク 企画・活動支援室) ◎9:30~20:00(土日祝は~18:00) ※無料 ◎月曜日(休日にあたる日を除く)、休日の翌日(土、日または休日にあたる日を除く)、第4木曜日(12月と休日にあたる日を除く)、年末年始(12/28~1/4) https://recorder311.smt.jp/material_room/

きてみてマップ

きてみてで紹介した施設のほか、あしたのクリエイティブで紹介した場所も掲載しています。

立ち寄りスポット



1 ないわん



商業観光施設「迎(ムカエル)」「結(ユウエル)」「拓(ヒラケル)」、まちづくりの拠点施設「創(ウマレル)」の4施設からなる、港と生活、文化が交差する新しいスポットで、気仙沼の新たな観光拠点となっています。

DATA ◎宮城県気仙沼市南町海岸1-14 ☎0226-48-5091 🕒10:00-17:00 📅各テナントの休日を参照
🌐<https://niiwan.info/>

2 石ノ森萬画館



「仮面ライダー」「サイボーグ009」で知られる漫画家・石ノ森章太郎の作品世界を再現したマンガミュージアム。貴重な原画展示や体験型アトラクションなどを通じて大人から子供まで楽しめる人気の観光スポットで、石巻の復興のシンボルとしても親しまれています。

DATA ◎宮城県石巻市中瀬2-7 ☎0225-96-5055 🕒9:00~17:00 (12/31は15時まで) 📅毎週火曜日(祝日の場合は翌日休館、GWや長期休暇期間は閉館) 🌐<https://www.mangattan.jp/manga/>

3 いわぬまひつじ村



被災した集落跡地を活用した、羊との触れ合い体験ができる複合交流施設。えさやり体験のほか、羊レースなどのイベントが毎週末開催されています。ゴールデンウィークには「May市」が開かれ、羊の毛刈りや仔羊の抱っこ体験などを楽しむこともできます。

DATA ◎宮城県岩沼市押分須加原61 ☎080-4105-5538 🕒10:00~16:00(12月から1月までは15時まで) 📅無休(荒天時を除く) 🌐<https://iwanumahitsuji.jp/>



宮城の復興の「いま」をSNSでお伝えしています！皆さまからの投稿もお待ちしております！



LINE



Facebook



X (Twitter)



Instagram

Baton

発行元

宮城県震災復興本部(事務局:復興支援・伝承課)
〒980-8570宮城県仙台市青葉区本町三丁目8番1号 TEL:022-211-2443

